一般社団法人日本医療情報学会

2018 年度課題研究会活動成果報告書

課題研究会名：医療 ICT と在宅連携のための標準看護マスタのモデル研究会

設置期間：2015 年 5 月～2019 年 3 月

代表幹事の氏名・所属：宇都由美子・鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

幹事の氏名・所属：石垣　恭子・兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科
伊藤　明美・神戸市立医療センター中央市民病院看護部
柏木　公一・国立看護大学校
岡田みずほ・長崎大学病院看護部・医療情報部
須原麻砂江・県立広島病院看護部
永野　智恵・医療法人近森会近森病院
前田　直美・一般財団法人医療情報システム開発センター
松本　智晴・熊本大学大学院生命科学研究部環境社会医学部門
村岡　修子・ＮＴＴ東日本関東病院
髙見　美樹・園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科

活動成果の概要：

2018 年度の本課題研究会の活動は、急性期から回復期、慢性期、在宅に繋がる標準的な看護計画マスタの構築を目指して、まず、急性期医療機関の看護現場で使用するマスタのコンセプト開発を目指した。具体的には、従来の疾患や術式、症状、リスク等による看護計画を、急性期入院医療に導入された DPC（Diagnosis Procedure Combination）とも紐づけられる仕組みを開発し、実際に鹿児島大学病院における実績データを用いて看護計画マスタのひな形を自動抽出した。臨床現場の看護師の協力を得て、課題研究会で開発したアセスメントの視点を加え、電子カルテに実装可能な看護計画マスタモデルを構築した。

アセスメントの視点を生かした標準的な看護計画マスタの必要性については、その開発が急がれる所であり、第 19 回日本医療情報学会看護学術大会のチュートリアル、ならびに第 38 回医療情報学連合大会の学会企画シンポジウムにおいて、課題研究会のメンバーが取り組んできた活動の成果を発表した。

学会における成果発表

１）第 19 回日本医療情報学会看護学術大会

2018 年 7 月 7 日（土)、高知市文化プラザ　かるぽーと

チュートリアル２：生産性と患者満足・仕事満足を高める患者記録のあり方

＜オーガナイザー＞

宇都由美子（医療 ICT と在宅連携のための標準看護マスタのモデル研究会・代表）

＜座長＞

石垣　恭子（兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科）

宇都由美子（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科・鹿児島大学病院）

＜演者＞

永野　智恵（社会医療法人近森会近森病院）

前田　直美（医療情報システム開発センター）

村岡　修子（ＮＴＴ東日本関東病院）

＜企画趣旨＞

2005 年、日本看護協会より「看護記録および診療情報の取り扱いに関する指針」が公表された。13 年以上前のものではあるが、現在の我々に通ずる価値ある警鐘が綴られている。①これからは個人情報保護と患者の視点が徹底的に尊重されるようになる、②インフォームド・コンセントに基づく医療の実践が求められるようになる、③病院の機能分化が進み、さらなる在院日数の短縮化が進む、④医療 ICT 化が進む、⑤医療安全に対する国民・患者の信頼が得られる医療の提供が求められるようになる、⑥すべての医療従事者に経営への主体的な取組が求められるようになる、という主旨である。

本チュートリアルでは、①チーム医療のために共有される記録としての看護記録（看護者による情報提供）のあり方、②看護必要度に代表される施設基準を満たすための記録が看護ケアの生産性に及ぼす影響、③看護の専門性を高め、今後の二次利用に耐えうる看護記録を支援する標準的なマスタ開発や ICT 支援を柱として、意義あるチュートリアルの機会としたい。

２）第 38 回医療情報学連合大会

2018 年 11 月 24 日（土)、福岡国際会議場

大会企画 4：生産性と患者満足・仕事満足を高める患者記録のあり方～特にチーム医療における看護記録（看護者による情報提供）のあり方～

＜オーガナイザー＞

宇都由美子（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

＜座長＞

宇都由美子（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

石垣　恭子（兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科）

＜演者＞
前田　直美（一般財団法人医療情報システム開発センター）
伊藤　明美（神戸市立医療センター中央市民病院）
高見　美樹（兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科）
村岡　修子（一般社団法人日本看護業務研究会）
宇都由美子（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医療システム情報学）

＜企画趣旨＞

諸外国に例を見ない速度で高齢化が進んでいる我が国では、団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年以降は国民の医療・介護の需要がさらに増加することが見込まれ、地域包括ケアシステムの構築が急がれている。その一方で生産労働人口の減少に伴い、労働生産性をあげ、仕事満足度を高めるために働き方改革が急ピッチで進もうとしている。これらの社会的な変化を背景として、医療界においてはチーム医療というキーワードが重要になってきた。

本シンポジウムでは、①チーム医療のために共有される記録としての看護記録（看護者による情報提供）のあり方、②看護の専門性を高め、今後の二次利用に耐えうる看護記録を支援する標準的なマスタ開発や ICT 支援を柱として、意義あるディスカッションを進めていきたいと計画している。

活動成果の発表：

［雑誌論文］　計（1）件

1）アセスメントの視点とケア実践項目を関連づけた標準看護計画の開発、臨床看護記録 12.1 月号、pp.85-90、日総研出版、2018.

［学会発表］　計（5）件

1）前田直美、多職種連携のための記録に利用される用語のあり方、第 38 回医療情報学連合大会論文集、pp.66-67、2018.
2）伊藤明美、システムレベルアップを契機とした診療記録の一部としての看護記録の標準化への挑戦、第 38 回医療情報学連合大会論文集、pp.68-69、2018.
3）高見美樹、地域包括ケアに向けた多職種連携におけるヘルスケアサービス共通用語の検討、第 38 回医療情報学連合大会論文集、pp.70-71、2018.
4）村岡修子、多職種多施設連携のための標準ケアセット－「Health Care books（HC books)」－、第 38 回医療情報学連合大会論文集、pp.72-73、2018.
5）宇都由美子、看護の皮をむいていったら、一体何が残る、第 38 回医療情報学連合大会論文集、pp.74-75、2018.